

随

想

「青年は荒野をめざす」 〜旅立つ君に〜

フロントガラス越しに月が見えるが、月のことよりも後ろの息子に何と声をかけたらいいいのか、何も言わなくてもよいのか、駅はもうすぐ。息子の横にはパンパンに膨れた大きなバックパックがある。大学生の息子は休学して、半年間、世界を回ってくるという、一人で。私の本棚にあった『深夜特急』に触発されたのか。何もそんな危険な目に遭うようなことを進んでしなくてもいいのではという思いもする。そんな自分自身も40年前、大学生が外国へ行くのが珍しい時に、2か月間アメリカへ行った。「外国へ行くなんて、一生に一度でいい」と、当時、数次旅券もあつたが、今はない一次旅券にしると母親に言われた。親はどんな思いで私を送り出したのだろうか、私が帰国するまでの間、どんなに心配していたのだろうか。その時の私には、2か月間の寝起きするところは、あらかじめほぼ決まっていた。しかし、息子の旅には、日本から西へ向かい地球を一回りするという大まかなルートが

決まっているだけで、どんなところに泊まるかは、その時にならないとわからない。学生時代の私のものとは比べものにならない。でも、何かが若い心を突き動かしているのは、私の時も息子も同じだろう。誰も止めることはできない。無事に帰ってきた時は大きく成長しているだろう。10分ほどで駅に着いた。車からバックパックを引きずり下ろす息子に、私は振り返って「気をつけて行って来いよ」と一言、声をかけた。家に戻る途中、運転しながら後悔した。何かもつとっておくべきだったか。彼は旅立っていった。

